

近代経済学の認識論的基礎

小 林 保 美

I. はじめに

経済学の危機が叫ばれるようになってすでに久しい。経済学の混迷を眼前にして、いまほど方法論的反省が切実に求められているときはないであろう。¹⁾ その際の作業の進め方の一つとして、つぎのようなアプローチの仕方が考えられるであろう。すなわち、経済学の歴史を振り返ってみると、経済学の理論体系は、方法論的観点から見ても、また形式的な面から見ても、古典派経済学、マルクス経済学、および近代経済学の三つに大別することができるがゆえに、これら経済理論体系の三大潮流について、方法論的観点から検討を加えてゆく、というやり方である。

ところで、理論経済学の目的のひとつは、経験対象たる経験的現実から認識対象を抽出・確定し、それに関する諸法則を獲得し、さらにそれらを一つの有機的構成体たる理論体系として樹立することにある。また、経済政策論の目的のひとつは、かかる理論体系を現実の問題解決のために活用することである。それゆえ、各々の経済理論体系を方法論的に考察する場合、その拠って立つ認識論的基礎と、種々の理論およびそれらを構成する法則に関する方法論的考察がとりわけ重要となろう。古典派経済学およびマルクス経済学に関しては、筆者はすでに、かかる観点から方法論的に検討を加えたことがあるので、²⁾ 本稿では、近代経済学の認識論的基礎について考察してゆくことにしたい。その際、「近代経済学」(modern economics)という用語は多分に便宜主義的なものであり、このなかには多くの諸学派

が包摂されているが、上記三大潮流の一つとして近代経済学をとり上げ検討してゆくがゆえに、本稿では、近代経済学という用語に包摂される諸学派を個別に検討することはせず、その一般的特徴を明らかにしてゆくことにしたい。それゆえ、本稿では、通常の近代経済学という用語法の意味するところにしたがって、その認識論的基礎を包括的かつ詳細に検討してゆくことにする。近代経済学の法則および理論の特質についての考察は、次稿の課題である。

Ⅱ．近代経済学成立の精神史的背景

古典派経済学は、経済現象を斉一的な自律的体系としてとらえていた。しかも、かかる自律的体系は、諸個人間の競争を通じておのずから実現するものと少なくとも19世紀後半にいたるまでは考えられていた。古典派経済学によって構築された経済理論体系が説くように、社会はあたかも調和ある発展を遂げつつあるかのように見えた。しかし、諸個人の利己心の発動による主体的活動の結果、均衡するはずであった自由競争のメカニズムは、19世紀中葉以降、規模の拡大および組織の複雑化などによって、その競争を通じて作用するところの調整作用が歪曲されてしまい、分配の不均衡化や周期的恐慌、それにともなう失業等々といった不均衡現象を現出させるにいたった。いまや、われわれを取り巻く経験的現実としての経験対象は、斉一的・自律的なものとしてではなく、混沌とした多様と感ぜられるようになった。経験対象のとらえ方に対するこうした変化は、後に論ずるように、経済学の認識方法に大きな影響をおよぼすこととなった。

さて、このように複雑・巨大化して見通しがたくなつた価格のパラメーター機能あるいは市場メカニズムのなかに機能化されることに対して不安を感ずるようになった市民的諸個人は、みずからの生活体験のうちに掴まれた主体的確実性にもとづいて、このメカニズムを理論的に再編成し、こ

れを安住の境地として再確認しようと欲するにいたった。このような精神的状況を背景に考案されたものが、1870年代にメンガー（Carl Menger）、ジェボンズ（William Stanley Jevons）、およびワルラス（Léon Walras）によってほとんど時を同じくして唱えられた「主観的価値論」である。近代経済学はこの3人による「限界革命」によって誕生したのであるが、その背景にはこのような古典的調和の崩壊に対する不安という精神的状況があったことを忘れてはならない。³

Ⅲ．カントの先験論的立場

古典派経済学の認識方法は経験論にもとづいていた。⁴これに対して、近代経済学は「先験論」（Transzendentalismus）をその認識論的基礎としていると考えられる。そこで、以下に必要なかぎりにおいて、「先験論」について概観してゆくことにしよう。

経験論を確立したロック（John Locke）は、一切の観念の起源を経験に求めた。カント（Immanuel Kant）によれば、そうした見解は観念の起源についての心理的説明をなすものであって、それはただ単に「事実に関する問題」（*quid facti*）にすぎず、認識がどのようにして生じたのか、という事実の究明のみによっては認識の真偽は判明しない、という。そして彼は、認識の根拠それ自体を究明することが必要だと主張する。つまり、「事実にかくかくである」ということが問題なのではなく、「なぜかくかくでなければならないのか」が問題である、というのである。さらにいえば、認識の「心理的起源」が問題なのではなく、認識の「論理的根拠」が問題なのである。彼はこれを「権利に関する問題」（*quid juris*）と呼び、これに関する考察が認識批判の課題であるという。

このような課題を探究した結果、カントが見出した最も重要なことは、われわれの認識能力のうちに先天的な要素ないし形式が存在する、という

ことである。カントによれば、もしわれわれの認識がすべて経験的・後天的（*a posteriori*）性格を持つものであるならば、われわれは決して普遍的・必然的認識に到達することはできない。なぜならば、経験的認識は、ある事象がかくかくである、ということは教えてくれるが、なぜにその事象が必然的にかくかくでなければならないのか、ということは決して示すことができず、さらに、経験的認識は、われわれが従来観察した範囲内においてはかくかくであった、ということは教えるが、その他のすべての場合、あるいは未知の未来に対しても普遍的・必然的にそうである、ということは示しえないからである（D. ヒュームの懐疑論的帰結）。

したがって、このことは、もしわれわれが認識の普遍性および必然性を持ちうるとするならば、われわれ自身のうちに先天的（*a priori*）な認識形式が存在しなければならないことを示すものである、といわねばならない。それゆえ、カントはつぎのように述べるのである。

我々の認識がすべて経験をもって始まるということについては、いささかの疑いも存しない。我々の認識能力が、対象によって喚びさまされて初めて活動を始めるとししたら、認識能力はいったい何によってはたらき出すのだろうか。対象は我々の感覚を触発して、或はみずから表象を作り出し、或はまた我々の悟性をはたらかせてこれらの表象を比較し結合しまた分離して、感覚的印象という生の材料にいわば手を加えて対象の認識にする、そしてこの認識が経験と言われるのである。それだから我々のうちに生じるどんな認識も、時間的には経験に先立つものではない、即ち我々の認識はすべて経験をもって始まるのである。しかし我々の認識がすべて経験をもって始まるにしても、そうだからといって我々の認識が必ずしもすべて経験から生じるのではない。

さらにカントは、認識能力には「感性」（*Sinnlichkeit*）と「悟性」（*Verstand*）の2種があるとして両者を峻別する。すなわち、

我々の認識は心意識の二つの源泉から生じる。第一の源泉は、表象を受け取る能力（印象に対する受容性 *Rezeptivität*）であり、また第二の源泉は、これらの表象によって対象を認識する能力（〔悟性〕概念の自発性 *Spontaneität*）である。第一の能力によって我々に対象が与えられ、また第二の能力によって対象がこれ

らの表象（我々の心意識の単なる規定〔意識内容〕としての）との関係において思惟される〔考えられる〕。それだから直観と概念とが、我々の一切の認識の要素であり、従ってまた或る仕方で自分に対応する直観をもたない概念も、或はまた概念をもたない直観も、それだけでは認識になりえない。

我々の心意識の受容性は、心意識がなんらかの仕方で触発される限りにおいて、表象を受けとる能力である。そこで我々がこの受容性を感性と名づけるならば、これに対してみずから表象を生み出す能力、即ち認識の自発性は悟性である。我々の直観が感性的直観以外のものであり得ないということ、換言すれば、我々が対象から触発される仕方以外のものを含まないということは、我々人間の自然的本性の必然的な在り方である。これに反して、感性的直観の対象を思惟する能力は悟性である。

このように、感性によって対象が与えられるのであり、悟性とは、感性によって与えられた対象を思考し、概念や法則および理論を構成する能力なのである。感性が外なるものを内へ受け入れるという受動的性格を持つのに対して、悟性は本来自発的・能動的性格を持つ。

感性と悟性、この二つの認識能力の統一によってのみ、われわれは認識が可能となる。カントの言によれば、「我々にあっては、悟性と感性とが結合してのみ対象を規定し得るのである。もし我々が悟性と感性とを分離するならば、我々は概念のない直観か或は直観のない概念をもつにすぎない」のである。たとえ、どんなにわれわれの認識能力（ここでは悟性の意）が自発的・能動的であろうとも、それ自体が認識の対象を生み出すことはできない。それは外から与えられるものであり、感性の働きによるのである。対象（意識内容）のない認識というものが存在しない以上、感性は認識にとって欠くことのできない要因である、といわねばならない。また他方では、感性による直観は、個々別々のものであり、それ自体は何らの統一性も有しないものであるから、これらを整合的に統一するものが存しなければならない。もしそうでなければ、われわれの認識は体系的認識とはなりえないからである。

このような個々別々の多様な直観を統一する働きをなすものが悟性にはかならない。しかも、この悟性は外から与えられたものではない。感性によって対象（意識内容）を受け入れ、悟性によってこれを整合的に統一する。これがカントのいう認識にはかならない。したがって、彼によれば、認識とは意識内容と形式との統一なのである。このことは、彼のつぎの叙述に端的に示されている。

感性と悟性——この二つの特性は、そのいずれかを他にまさっているとはできない。感性がなければ対象は我々に与えられないだろうし、また悟性がなければいかなる対象も思惟されないだろう。内容のない思惟 [直観のない概念] は空虚だし、また概念のない直観は盲目である。それだから対象の概念を感性化する（即ち対象の概念に、直観された対象を与える）のも、また対象の直観を悟性化する（即ち対象の直観をそれぞれの概念のもとに按排する）のも、両つながら等しく必要なことである。⁹⁾

イギリス古典経験論は感覚と反省とによって認識が成立すると考えたが、このことは、カントによれば、認識の一側面にすぎず、それは単に感性にのみかかわっているものである。これに対して、彼は、悟性の自発的・能動的な側面を暗闇から浮かび上がらせたのである。

ここにカントは、対象というものが、けっしてわれわれの主観から独立にそれ自体において存在しているわけではなく、われわれの主観の先天的形式によって構成されたものである、と考えたのである。認識の対象は、主観の先天的形式によって秩序づけられることによってはじめて成立する、とカントは考える。われわれが対象と考えるものは、実は主観がみずからの形式によって構成したものにはかならない。認識問題の中心は、もはや対象にあるのではなく主観に存するのである。従来の経験論が、つねに対象を中心に認識の問題を考察し、認識は対象を模写することによって成立する、と考えていたことを想起すると、われわれはここに、対象の受動的な模写說的認識から、対象の主観による能動的な構成へ、という認識方法の転換を見て取ることができよう。¹⁰⁾

Ⅳ．経験対象と認識対象の峻別

上に述べたような立場にもとづくということは、いまや経験対象と認識対象との峻別が可能となったことを示している。なぜなら、上の立場によれば、そもそも認識とは経験対象に関するものではなく認識対象に関するものであり、認識の素材としての個々別々の多様な経験的現実すなわち経験対象が認識対象となるためには、経験対象が主観の構成作用によって統一されなければならない、この作用によってのみ統一的な認識対象が成立するからである。カント流に言えば、直観の多様な経験対象から主観の自発的・能動的な構成作用によって基礎概念（本質概念）が形成され、これに関連のある事象が直観の多様から選択・構成されて、統一的対象としての認識対象が成立するのである。カントもこの点に関して、「客観は、与えられた直観における多様なものが一つの概念によって結合せられたところのものである¹¹⁾」と述べている。かくして、ここに経験対象と認識対象との峻別がはじめて達せられることとなったわけである。

筆者にとり非常に興味深くまた重要と思われることは、経験対象と認識対象を区別しえずこれを同一視していた立場およびこれを認識論的基礎としていた経済学の学派（イギリス古典経験論とこれにもとづく古典派経済学）と、この両者を峻別する立場および学派（カントおよび新カント派などの先験論とこれにもとづく近代経済学）との間での、経験対象の性質についてのとらえ方の相違である。前者は、経験対象と認識対象を同一視していた。そこでは、経験対象は斉一的なものに見なされていた。それゆえ、経験対象の模写が可能であり、認識とは模写すること、そして経済法則とは斉一的な経済現象のなかに潜む因果関係を模写したのと考えられていた。これに対して、前者では斉一的なものに見なされていた経験対象が、後者においては渾然一体たる複雑多様なものと見なされている。経験対象をこのように観るようになった理由はいくつか挙げられようが、第Ⅱ節にお

いても述べたように、神の見えざる手による古典的調和がもはや崩壊し、社会が複雑・巨大化して種々の暗黒面が現われはじめてきたことが人々の思考に反映した、ということが最大の理由ではないかと思われる。19世紀後半以降の社会・経済現象を複雑多様ではなく斉一的であるという人はよもやいないであろう。それはさておき、経験対象と認識対象を区別する立場あるいは学派の人々は、いずれも経験対象を複雑多様なものと観る点で一致している¹²⁾。このことはまた、逆説的に、経験対象を複雑多様なものであると考えたからこそ、経験対象と認識対象の峻別が必要となり意識された、ということもできよう。経験対象が複雑多様なものであれば、これを模写することは不可能だからである。

経験対象の複雑性ならびに多様性について、後期新カント派独逸西南学派のリッケルト (Heinrich Rickert) は、「経験的現実¹³⁾は、我々には見極めがたい多様であり、我々がそれに沈潜しそれを細かく分析し始めるに依じて、その多様性は益々大きくなるように見える」といい、経験的現実（経験対象）の「見極めがたい多様」を「連続的異質性」(eine stetige Andersartigkeit)¹⁴⁾と称している。リッケルトによれば、経験的現実は、「どの点に於てもはっきりした絶対的限界をもっておらず、却って全く漸次的な移行である¹⁵⁾」という。そして、「空間的に拡がりのある、或いは或る長さの時間を充たすあらゆる形象は、みな此の連続性の性格を持っている¹⁶⁾」。このことを彼は、「現実的なものの連続性の原理」(Satz der Kontinuität alles Wirklichen)¹⁷⁾と称する。さらに経験的現実においては、「世界に於ける如何なる事物如何なる事象も他と完全に同じであるものはない、ただ多かれ少かれ似ているだけのことである。そしてあらゆる事物あらゆる事象の内部に於ては再び、その如何に小さい部分でも必ず、空間的時間的にどれほど近い又はどれほど遠いどの任意の部分とも区別される。あらゆる実在はそれ故に、いずれも特異な、独特な、個性的特色を現わしている。……(中略)……万物は異なっているのである¹⁸⁾」。このことを彼は、「現実的な

ものの異質性の原理」(Satz der Heterogenität alles Wirklichen) と定式化する¹⁹。このように、あらゆる経験的現実¹⁹は、連続的であるとともに異質的、すなわち「異質的連続」(ein heterogenes Kontinuum)なものとして現われる。経験的現実¹⁹は、「その如何なる部分に於ても異質的連続である²⁰」から非合理的なものといわねばならない。

リッケルトによれば、異質的連続たる現実¹⁹は、そのあるがままの姿においては非合理的なものであるから、これをそのままの姿で合理的に認識することは不可能である。このような非合理的で見極めがたい経験的現実¹⁹を模写することは不可能であるし、またあえてそれを行ったとしても、経験的現実¹⁹が本来非合理的であるかぎり、それは合理的な認識を意味しえず、むしろ無意味といわざるをえない。ここに、彼の模写説否定論の根拠がある。

もし、経験的現実¹⁹を真に認識しようと欲するのであれば、非合理的なそれを改造し、合理的なものにしなければならない。つまり、「異質的連続」という非合理的なものを「同質的連続」(einem homogenen Kontinuum)あるいは「異質的不連続」(einem heterogenen Diskretum)に変形することによってはじめて合理的な認識が可能となるのである²¹。このことは、認識とは、経験対象を模写することではなく、主観がそれを変形・改造し抽象化することを意味している。したがって、異質的連続たる経験的現実¹⁹を主観が能動的に改造し抽象化したものが認識対象にほかならない。ここにいたって、「経験対象」を複雑多様なもの、すなわち「異質的連続」としてとらえ、また「認識対象」とは主観が異質的連続たる経験対象を抽象化することによって再構成した「同質的連続」あるいは「異質的不連続」である、という両者の区別が明確になされることになったのである。

V. 終わりに

以上の考察から明らかになった点をまとめると、つぎのようにいうことができよう。①経験科学の認識においても、先天的要素ないし形式が存在すること、②認識は、主観の自発的・能動的な構成作用による整合的統一であること、③経験対象と認識対象が明確に区別されるようになったこと。前者は複雑多様な非合理的なものであり、後者は前者を合理的に認識するために主観が思惟操作によって再構成したものであること、である。

これまでの議論から、近代経済学の認識論的基礎が明らかになったことと思われる。したがって、次稿では、これらの議論を踏まえつつ近代経済学における法則および理論の性質について考察してゆくことにしたい。

註 1) 『経済理論の危機』(Daniel Bell and Irving Kristol, eds., *The Crisis in Economic Theory*, New York: Basic Books, 1981), 『なぜ経済学はいまだ科学ではないのか』(A. S. Eichner, ed., *Why Economics is Not Yet a Science*, London: Macmillan, 1983), 『経済学において何が間違っているのか』(B. Ward, *What Wrong with Economics?*, London: Macmillan, 1972), および、『混迷の経済学』(P. Wiles and G. Routh, eds., *Economics in Disarray*, Oxford: Basil Blackwell, 1984) 等々といった題名の書物の刊行は、経済学において幾分か危機の存在していることを示唆している。近年、こうした状況を背景に、経済学においても方法論的問題に対する関心が高まってきた。このことは、この主題に関する多くの書物の刊行と、*Economics and Philosophy*, および *Research in the History of Economic Thought and Methodology* という2冊の新規雑誌の刊行によっても窺い知ることができる。

2) 拙稿「古典派経済学の方法」、『現代科学論叢』、第26集(1992年12月)、44-55頁、拙稿「マルクス経済学の認識論的基礎」、『日本大学短期大学部(習志野校舎)一般教育教室研究紀要』、第3号(1993年3月)、53-77頁、拙稿「マルクス経済学における法則の性質について」、『現代科学論叢』、第27・28合併集(1994年12月)、28-43頁、および、拙稿「マルクス理論における理論と現実、及び認識と実践」、『現代科学論叢』、第27・28合併集(1994年12月)、44-59頁を参照のこと。

3) 武藤光郎著『経済学史の哲学——経済哲学 I ——』(創文社、1969年)、155-203頁。

- 4) 前掲拙稿「古典派経済学の方法」を参照のこと。
- 5) Immanuel Kant, *Kritik der Reinen Vernunft*, der ersten Ausgabe 1781, in Neu Herausgegeben von Theodor Valentiner mit Sachregister, *Immanuel Kant Samtliche Werke*, Band 1 (Leipzig: verlag von Felix Meiner, zwölfte Auflage 1922), S.47. 篠田英夫訳『純粹理性批判』(全3冊, 岩波文庫, 1961-1962年), 第1分冊, 57頁。傍点原著者。○印引用者。
- 6) Ebenda, S.106. 同訳書, 第1分冊, 123頁。傍点原著者。
- 7) Ebenda, S.107. 同訳書, 第1分冊, 124頁。傍点原著者。
- 8) Ebenda, S.289. 同訳書, 第1分冊, 336頁。傍点原著者。
- 9) Ebenda, S.107. 同訳書, 第1分冊, 124頁。○印引用者。
- 10) カント自らこれを天文学におけるコペルニクスの業績に比したため, 通常これは「コペルニクスの転回」といわれている。
- 11) Kant, a.a.O., S.154. 前掲訳書, 第1分冊, 180頁。傍点原著者。○印引用者。

なお, ここでカントのいう「一つ概念」の意味するところは, 通常, 方法論議でいわれるところの個別科学における「本質概念」と同義である。

- 12) 歴史学派と称される人たちのなかにあつて, ラート (K. W. Rath), プツチュ (Theodor Pütz), ヴェント (Siegfried Wendt), ボルノー (O. F. Bollnow), ワイペルト (Georg Weippert), およびクレツシュマー (Hans Kretschmar) 等は, 国民経済および国家経済の現実を見るならば, それは決して混沌たる多様ではなくして, 「意味ある全体への形成された秩序」あるいは「事態の統一」(Einheit der Sache) であると主張する。かかる主張に対して, 一言にして私見を述べるならば, ラート等の主張のなかの「国民経済」あるいは「国家経済」という言葉からも明らかなように, 彼らが「意味ある全体への形成された秩序」あるいは「事態の統一」というのは, 認識対象の次元での議論であつて, 経験対象の次元での議論ではないことが理解できよう。周知のごとく, ラート等は, 存在論的立場から経済学および財政学の方法論を展開したのであるが, いかなる認識論的立場によろうとも, 科学的認識の範囲あるいは素材としての経験対象は複雑多様なものと考えてよいのである。

また, 彼らの議論については, 板垣与一著『政治経済学の方法』(日本評論社, 1942年), 第5章を参照のこと。さらにまた, 板垣与一「歴史学派」, 東京商科大学一橋大学新聞部編『経済学研究の栞——経済学説史編——』(春秋社, 1948年), 131-184頁, および, Erwin Wiskemann und Heinz Lütke(eds.), *Der Weg der deutschen Volkswirtschaftslehre: Ihre Schöpfer und Gestalter* (Berlin, 1937); 金子弘訳『独逸経済学の道』(日本評論社, 1943年), 第10章~第12章も参照のこと。

- 13) Heinrich Rickert, *Kulturwissenschaft und Naturwissenschaft* (Tübingen: Verlag von J.C.B.Mohr, Paul Siebeck, vierte und fünfte, verbesserte Auflage, 1921), S.33. 佐竹哲雄・豊川昇訳『文化科学と自然科学』(岩波文庫, 1939年), 66頁。傍点原著者。
- 14) Ebenda, S.35. 同訳書, 69頁。
- 15) Ebenda, S.34. 同訳書, 68頁。傍点原著者。
- 16) Ebenda, S.34. 同訳書, 同頁。傍点原著者。
- 17) Ebenda, S.34. 同訳書, 同頁。傍点原著者。
- 18) Ebenda, S.34-35. 同訳書, 68-69頁。傍点原著者。
- 19) Ebenda, S.35. 同訳書, 69頁。傍点原著者。
- 20) Ebenda, S.35. 同訳書, 同頁。傍点原著者。
- 21) Ebenda, S.36. 同訳書, 70-71頁。

経験的現実を, 異質的不連続へ改造するのが文化科学的認識・個別化的概念構成であり, 同質的連続へ改造するのが自然科学的認識・一般化的概念構成である。こうしてリッケルトは前者を主張した。その後の展開を経済学にかぎっていえば, 前者の立場は歴史学派に受け継がれ, 後者の立場は近代経済学の認識論的基礎をなしている。

付記 本論文は, 平成9年度敬愛大学経済文化研究所助成金(個人研究)による研究成果の一部を公表したものである。